

特別支援学級における英語活動 —小学校での実践から②—

杉山明枝¹⁾ 鈴木幸子²⁾ 小林省三²⁾

要 旨

2007年7月より、東京都江戸川区立二之江小学校特別支援学級（わかくさ学級）において英語活動を開始した。児童にとって身近で基本的な英語を体験的に学びながら外国語（学習言語に限定しない）に対する興味・関心を促し、視覚教材や模型などを導入するなど児童のコミュニケーション能力向上をはかるための支援を継続してきた。その結果、活動開始初年度には簡単な語彙や表現に反応したり、英語活動に積極性を示すなど彼らにコミュニケーション能力の素地が芽生え始めた。さらに開始2年目になると、子ども達がこれまで学んだ語彙やフレーズを使って自ら積極的に表現しようとする姿が見られるようになり、英語のみならず日常生活においても彼らのコミュニケーションがより豊かなものに発展してゆく様子を実感することが出来た。

今年度は、理解力別のグループ編成、歌やリズム、また読み聞かせなどの多様な活動を展開させて一人一人の知的好奇心を満たしつつ、子ども達が主体的に活動できるよう配慮をしながら彼らの「非言語」も含めた上でのコミュニケーション能力を更に高めていくことを念頭に置き、実践を継続している。

キーワード：特別支援学級、コミュニケーション能力、英語活動、買い物ごっこ、非言語コミュニケーション

I. 緒言

本研究では、江戸川区立二之江小学校特別支援学級（以下わかくさ学級）における2年間の英語活動の実践を報告すると共に、児童のコミュニケーション能力の変容の様子を個別事例も含めて明らかにする。そしてその結果から、わかくさ学級の児童にとっての英語活動の意義や効果的な指導のあり方、ひいては今後の課題について検討してゆきながら今年度の取り組みへと繋げてゆきたい。

1. 特別支援学級と小学校での英語活動の背景

まず、特別支援学級ならびに小学校英語活動に関する基礎知識を紹介する。

1) 特別支援学級

平成18年6月の学校教育法等の一部改正（平成19年4月より施行）により、これまでの「特殊学級」

の名称が変更されたものが特別支援学級である¹⁾。学校教育法第75条では、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び幼稚園において、次の各号、即ち1. 知的障害者、2. 肢体不自由者、3. 身体虚弱者、4. 弱視者、5. 難聴者、6. その他の障害のある者で特別支援学級において教育を行うことが適当な者、のいずれかに該当する児童、及び生徒のために教育的支援を行うものとされている²⁾。特別支援学級（小学校・中学校）では障害の種別ごとの少人数学級で、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、それに対応した指導を行う³⁾。

2) 小学校における英語活動

小学校学習指導要領の改訂により、2009年度から2年間の移行期間を経て、2011年度には全国の小学校で5、6年生を対象に外国語（英語）活動が開始されることになった⁴⁾。『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』⁵⁾では外国語活動の目標として、①外国語を通じて、言語や文化について体験的

1) 東京都荒川区教育委員会

2) 東京都江戸川区立二之江小学校

に理解を深める、②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る、③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる、の3点を掲げている。以上の目標を踏まえた上で、日本や外国の文化（学習対象言語とは限定しない）を体験しながら「知識やスキルよりも、コミュニケーションを図ろうとする態度」⁶⁾を養い、外国語の音に慣れさせるとともに、コミュニケーション能力の素地を養うこととしている。つまり、小学校英語の目標はスキル習得ではなく英語を使うことの楽しさ、相手に自分の意思を伝えるというコミュニケーション能力の重要性を、体験を通して学ぶことにある。それは英語を話せるようになることが最終目標ではなく、英語活動を通して様々な体験をさせることで、国際コミュニケーション能力の素地（共生、自己決定能力、主体性）を育成することを意味するのである。

尚、本稿で言及する「コミュニケーション能力」とは外国語活動の目標として挙げられた3点を通して養われる能力のことを指している。

3) 特別支援学級と英語活動

特別支援学級における児童や障害を持つ子どもへの英語活動の有効性を報告する事例は、これまでいくつか紹介されている。木村他⁷⁾は、英語をはじめとする他言語教育が自閉症児のコミュニケーション能力向上のために非常に有効であると共に、大きな可能性を秘めていると指摘している。また渡邊⁸⁾によると、「不登校児や自閉症児が楽しく英語活動に参加したり、ALT（外国人英語教師）と臆することなく話をしたりするという知見を得た」といい、障害を持つ子どもへの英語活動の有効性が指摘されている。小林⁹⁾は、自閉症児には特有のこだわりがあり、繰り返して発声するという特徴を持つため、発音の反復練習や歌、チャンツ（歌のようにメロディーはないが、リズムに合わせて表現を繰り返し、それらに慣れ親しませるもの）¹⁰⁾等の活動を中心に構成された英語活動が彼らの特性に適し、英語活動が成立する要因となると主張している。

こうした理論的背景が支えとなり、2007年7月より江戸川区立ニ之江小学校わかさ学級において英語活動が開始された。わかさ学級には発達段階や障害の程度が大きく異なる児童が在籍しているが、だからこそ一人一人の興味、関心に即した多様な活動が可能である英語活動は彼らのコミュニケー

ション能力を養うためには大変有効であると考えた。

そこで、学級目標として「時間や場面の共有を通して、人とかかわることの大切さと楽しさを感じることができる学級作り」を掲げ、英語活動を導入することで、コミュニケーション能力の素地を養い、言葉をコミュニケーションの手段として使うことの大切さや楽しさを体験的に学ぶ機会を設けたのである。

Ⅱ. 教育活動と成果

1. 初年度の英語活動と成果

1) 活動内容 2007年7月～2008年3月

英語活動開始当初の2007年7月から2008年3月にわたる15回の英語活動の内容と児童の様子、成果等を述べる。対象児童は15名、主な障害は自閉症や高機能自閉症などを含む広汎性発達障害やダウン症等である。

目標を次の2点とした。①英語活動の楽しさ、英語を使ってコミュニケーションする喜びを味わわせ、コミュニケーションを図ろうとする意欲を育む。②英語の歌、リズム遊び、ゲーム、全身を使った活動等を通して、英語の音声に慣れ親しませる。また、授業のテーマ（単元）やトピックは生活に身近な挨拶、自己紹介、買い物等を取り上げた。

指導は、日本人英語教師（以下JTE：Japanese Teacher of English）¹¹⁾の杉山明枝がT1（主たる指導者）として全て英語により行った。ALTではなくJTEを採用した理由として、日本語を母語話者とするJTEであれば障害の特性や一人一人の実態、個別的な支援方法などに関する知識を正確に伝え、理解を得ることができると考えたからである。障害児にかかわった経験が少ない相手に対しても、それぞれの児童の障害やその支援方法などについて、その都度繰り返し説明することで、理解を得ることが可能である。学級担任4名、及び介助員3名はT2（T1のサポート役）として、場面により個に応じて英語と日本語で支援をした。

2) 児童の変容と成果

英語活動開始当初は、歌やチャンツに対しては聴覚過敏や騒々しさが苦手な児童は耳をふさぐなどの行動を示したものの、大半の児童が興味を持った。

2学期に入り、数字や食べ物、日時、天気、動物、色などの多くの児童の興味、関心に即した語彙や題

材を導入することで、児童が積極的な態度を示し始め、日本語と英語を区別して英語で表現できるようになり始めた。ほとんど無関心に見えた児童が突然挙手をし、“apple”と発言したり、大人とのかかわりを楽しめることが少なかった児童が微笑みながら朝昼関係なく“Good morning”と嬉しそうに近寄るなどの姿が見られた。また活動が終わりに近づくと大声で“Oh no.”と言いながらJTEに駆け寄りしがみつくとする行動を示し始めた児童や、学級担任には「おはようございます」、JTEには“Good morning”というように対話の相手により英語と日本語を使い分けるコードスイッチング¹²⁾ができる児童も見られ始めた。

3学期の英語活動最終日には別れ際に“See you.”と目に涙をにじませながら手を振る児童の姿が見られた。

試行錯誤で始まった英語活動であったが、8ヶ月間、15回の活動を通して障害を持つ児童がコミュニケーションの楽しさを味わい、彼らにコミュニケーション能力の素地が育まれていることが実感できた開始初年度であった。

2. 2年目の英語活動と成果

1) 活動内容 2008年4月～2009年3月

英語活動開始2年目の2008年4月から2009年3月にわたる10回の英語活動の内容と児童の様子、成果等を述べる。年間指導計画は、余裕をもって指導ができるように配慮し、前年よりも内容を少なくした。目標並びに年間指導計画作成者は前年と同様である。指導は、前年同様JTEの杉山明枝がT1として全て英語により行い、T2の学級担任4名、及び介助員3名（以下T2）が場面により個に応じて英語と日本語で支援する形態に変化はないが、昨年よりも学級担任がT1として登場する場面が増えた。

2) 児童の変容と成果

1年生が7名加わったことで人数が20名に増え、学級の実態も大きく変化した。自閉症や自閉的傾向、広汎性発達障害等の児童が過半数を占め、他にはダウン症やADHDなどの障害を持つ児童も数名在籍した。昨年度の内容を取り入れたり、工夫を凝らした教材教具や体験的な活動を多く取り入れることでほとんどの児童が興味を持って積極的に活動に参加するようになる。また理解力の高い児童に対しては、

彼らの知的好奇心を満たすべく、クラスメートの名前をアルファベットで聞き取らせ誰の名前かを当てさせるなどの活動を導入した。1年生が「英語は？」と問いかけてきたり、友達と一緒に英語の歌を口ずさむ姿が見られた。月や曜日、天気、色、動物の名前などが英語で表現できるようになってきた児童や、送り迎えをしている母親に“See you.”“Good-bye.”と言いながら別れる児童、校門に立つ学校長や担任に“Good morning.”と挨拶する児童が増えた。さらに、家族に英語で話しかけてきたり、幼児向けの英語の番組を楽しめるようになったなど、児童にとって英語が身近に感じられるようになり、日々の生活や人とのコミュニケーションもより豊かなものになった。「教材教具の工夫」として、昨年度から開始した「買い物ゲーム」において野菜や果物の模型を導入することで児童の興味や関心、及び活動への意欲をひきつけることが出来た。

2学期に入ると英語を使ってコミュニケーションを取り合う相手がJTEから担任に広がり始める。「買い物ゲーム」において担任が店員、児童が客の役割を演じることで半数程度の児童が担任の話す英語を聞き取り、指示されたとおりに課題を遂行できるようになった。理解力の高い児童に対しては児童同士で店員と客の役割を互いに演じさせるなど、児童同士が英語によるコミュニケーションを楽しめるようになった。

3学期に入り、子供たちの実態や興味、関心に即した教材や教具を分かりやすく提示する工夫として教員による劇化（資料参照）を取り入れた。

このように英語活動開始2年目は、身近で基本的な英語（音声や言葉）を体験的に学びながら（英語で）コミュニケーションすることの大切さやおもしろさを十分味わえるよう支援してきた。その結果、子ども達に着実に英語が身につけている様子が感じられた。

3. 個別記録

特別支援学級の児童の変容は数値化しにくいいため、授業の様子をDVDに撮影し、個別指導計画に基づいて評価すると共に、学校生活の様子も精緻に記録し、児童の変容をとらえた。本章では2年間の実践から顕著な変容を見た「自閉症児」と「ダウン症児」の2事例を紹介する。

1) A 児（男児 9 歳 3 年生 自閉症 IQ44）

2007 年 7 月の時点では大部分の介助が必要であり、数少ない英語表現で担任や特定の人にのみ意思が伝えられた。指示への反応はできるが適切ではない。こだわりが強く言葉を繰り返して覚えていることもあった。英語活動開始当初、一体何が始まったのかと日本語とは違う言語に接して当惑していた。

9 月になると担任の膝に乗って授業を受けることがしばしばあり、担任は A 児の耳元で JTE の英語を繰り返した。A 児は「うんうん」と相槌を打ちながら聞いていたが、担任が他の児童に支援のため移動すると、独りでいることに不安を抱くのか、授業に集中できなくなり大声で「こっち来て」と言う。英語活動よりも「人に接していきたい」という様子が見られた。

10 月には英語の歌“BINGO”を気に入り、授業以外に口ずさむようになった。何度でも繰り返すので何度でも歌わせるようにした。“BINGO”は秋の音楽会での曲目にもなり、A 児は得意そうに歌った。それ以外の歌、例えば“Hello Song”あるいは“Good Bye Song”も JTE の口元を注視して、声を出そうとしていた。

2008 年 6 月には、地下鉄で近隣のスポーツセンターに引率した際、地下鉄の列車に乗り合わせていたインド人男性に“Good Morning. How are you?”と語りかけた。

2) B 児（男児 9 歳 3 年生 ダウン症 IQ 測定不能）

2007 年 7 月の時点では数個の単語で担任や特定の人（両親、担任）のみ会話が可能であった。「アー」「ウー」等、のどから搾り出すような声で判断しなければならず、よく話しかけてくるものの、内容がわからず担任に聞き返すことがしばしばあった。英語活動開始当初、発声はしないが、いつも JTE の口型をそっくりに模倣していた。

9 月になると、登校時、校門で「おはよう」と声をかけるが、「うんこ」などの言葉で挨拶してくる。引率する母親が「違うでしょう」と叱責しても、わざと言ってくる。しかし、あえて矯正はしなかった。

10 月、登校時、B 児に「おはよう」から“Good morning”に切り替えてみたところ B 児は“Good morning.”と挨拶をした。しかし発音は「ゲー」「ド」「モー」「ン」「グ」と区切り、時間がかかった。

11 月には日本語の上達が目立ち始めた。音楽の時間、担任は B に耳元で歌を聞かせていた。B 児

は歌詞を短く区切り、さらに一語ずつ真剣な顔で唇を尖らせながら歌っていた。

2008 年 3 月に行われた卒業式では B 児はそれまで歌うことのなかった校歌を大きな声で、音程も外さず歌い周囲を驚かせた。担任によれば、英語活動で歌った“BINGO”の歌を気に入り、それが大きく影響したのではないかという。

4. 活動の評価と課題

1) 2 年間の取り組みから得られた効果的な指導法のあり方

2 年間の実践を通し、わかくさ学級の児童への効果的な指導のあり方として次のような結論を得た。

- (1) 発音の正誤や声の大小など発語のみに焦点を当てるのではなく、「積極的にできた」ことを評価し賞賛することが次の意欲につながる。
- (2) 児童の混乱を避けるため、授業の一連の流れをパターン化し、開始と終了を明確にする。
- (3) 授業開始時に JTE がネームタグ（名札）を手渡すことで教師と児童の信頼感、一体感が生まれ、授業が円滑に進む。
- (4) 視覚教材の導入と模型などを利用した提示の工夫、体験的学習等を導入しながら個別支援を継続することで各児童が自分の好きな場を見つけて活動できるようになる。

2) 課題

2 年間の実践から、成果と共に以下のような課題も浮かび上がった。

- (1) 児童の発達段階や興味・関心に即した音楽や動作、チャンツをより多く取り入れることで、楽しく活動できる場面を増やし、活動内容のより一層の充実を図る。
- (2) 活動内容を分かりやすく伝えるための視覚的な教材や教具の開発とより有効的な活用方法などの研究を継続する。
- (3) メインの活動では、担任と児童が役を交代し、児童同士がそれぞれの役をこなすなど、活動の幅を広げながら児童同士がやりとりを楽しめようにする。
- (4) 個別指導計画に基づき、個々の実態に即した活動内容や課題の提示を行うと共に、個別の支援と評価を継続する。
- (5) 児童の実態や交友関係などを考慮しながら座席の配置や指名の順番を行うなど、一人ひとり

が活動に集中できるよう配慮する。

- (6) 一人ひとりが英語の音声やリズムを体全体で感じ、積極的に活動しながら、人とのやりとりを十分に楽しめる内容や教材、教具の精選を行う。
- (7) 在校生と新入生との差が非常に大きくなると考えられるため、次年度からの活動形態や内容の検討、計画の作成などの検討を十分に行う。

3) 個別記録に関する考察

(1) A 児 (男児 9 歳 3 年生 自閉症 IQ44)

A 児は英語活動の授業の中で顕著に反応するようになっていった。これは、英語活動の内容や英語のリズムが A 児の好みに合っていたためではないかと考えられる。2008 年 6 月に地下鉄でのインド人との “Good Morning. How are you?” という英語でのやりとりは A 児にとって大きな自信になったと考える。現在、英語活動中、A 児は担任の膝に乗ってはいない。誰を見ても「こっちおいで!」と呼びかけているが、授業中、着席する時間が長くなるなどの耐性が付き、自立心は着実に育っている。言語交流や社会性の発達が担任等の身近な人との関わりから外へと広がっていったことから、このことは窺うことができる。

(2) B 児 (男児 9 歳 3 年生 ダウン症 IQ 測定不能)

B 児の英語活動における反応はめざましく積極的になっている。ダウン症児の多くが発話に自信がないと言われるが、英語活動は B 児の心に響いたのではないだろうか。それが言語交流や社会性の発達を誘発し、大きな声で校歌を歌うことや担任等の身近な人のみとの関わりから外の世界へと広がっていったのではないかと考えられる。

5. 今年度の取り組み

英語活動開始 3 年目の 2008 年 4 月から同年 6 月にわたる英語活動の内容と児童の様子、成果等を 2 年間の取り組みから得られた課題を踏まえた上で述べる。

1) 課題を踏まえた上での今年度の取り組み

英語活動におけるこれまでの取り組みを通し、障害を持つ児童が「伝わる」「できる」という喜びを味わい、一人ひとりがより積極的、かつ主体的に楽

しく活動しながら児童同士が共感関係を築ける場面を創造してゆきたいと考える。そのためには児童に関わる全ての大人 (HRT や JTE、講師、介助員) が、児童の障害の特性や程度、理解力、さらには英語活動に対する興味・関心の度合い等に関する共通理解を図り、一貫性のある指導並びに支援を行わなくてはならない。

そこで昨年度までの実践と課題をもとに、以下のような取り組みを開始することにした。

- (1) メインの活動を児童の発達段階や興味・関心、並びに理解力に即した 3 つのグループに分けることで大人や子ども同士のやりとりが楽しめるようにする。
- (2) 一人ひとりの知的好奇心を満たすべく、歌やリズム、色遊び、数遊び、ごっこ遊び、読み聞かせなどの幅広い活動を展開させ、出来るだけ多くの児童が主体的に活動できるよう配慮をする。
- (3) 絵カードや模型、教員のデモンストレーションなどの視覚的な教材・教具を導入することで、1 年生や聞くことが苦手な児童、言葉の理解が不十分な児童に対しても、英語をより分かりやすく身近なものに感じられるようにする。
- (4) 障害の特性や発達段階、交友関係などを考慮しながら、座席配置を行う。

2) 目標

指導における目標は以下の 3 点である。

- (1) 楽しく英語活動に取り組み、英語を使う喜びを体験する。
- (2) 歌、リズム遊び、ゲーム、全身を使った活動をとおして、英語の音声に慣れ親しみ、コミュニケーション能力の素地を養う。
- (3) 言語や非言語によるやりとりを通して体験的に理解を深めることで、相手と積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成する。

3) 年間指導計画と指導案の作成

年間指導計画は、学習指導要領の 5、6 年の内容を参考に、児童の実態や興味・関心を十分に考慮しながら作成した。テーマ選択は動機付けの面から重要になるため、児童の生活に身近で、かつコミュニケーションを図りたくなるものを選択した¹³⁾。「5、6 年の内容」とした背景には、前述の通り 2011 年度から 5、6 年生を対象に英語活動が開始される

のに伴い文部科学省から出される『小学校学習指導要領』¹³⁾においても5, 6年生を対象とした指針と内容が掲載されているためである。

理解を深め一層の定着を図るため、数ヶ月間同じ単元を扱うが、言語スキルの習得を目的としない。

作成者はJTEの杉山明枝、監修は学校長の小林省三並びに学級担任の鈴木幸子教諭が担当した。

毎回の授業で使用する指導案はJTEと学級担任が作成するが、実際に顔を合わせることが困難であるため、FAXや電話を利用しながら検討している。

表1 年間指導計画(2009年度)

月	テーマ	活動内容
4月	くともだちになろう> (気持ち) (曜日・月・天気)	歌 <i>Hello Song</i> 絵本 <i>Brown Bear</i> Hello. I'm ~. Good morning. Good bye. Nice to meet you. How are you? I'm <i>good/happy/sad/angry/sleepy/sick/hungry/hot/cold/thirsty</i> . [What day is it today?] [It's] <i>Monday/Tuesday/Wednesday/Thursday/Friday/Saturday/Sunday</i> . [What month is it today?] [It's] <i>January/February/March/April/May/June/July/August/September/October/November/December</i> . [How's the weather today?] [It's] <i>sunny/cloudy/rainy/windy</i> .
5月 6月	く買い物に行こう> (果物・野菜・色・大きさ・数)	歌 <i>Ten Little Witches</i> 絵本 <i>Polar Bear</i> [May I help you?] ~, please. Here you are. Thank you. You're welcome. [It's] (a, an) <i>tomato/apple/cucumber/orange/grape/banana/eggplant/green/pepper</i> . <i>red/yellow/pink/green/purple/orange/blue</i> <i>big/small</i> <i>one/two/three/four/five/six/seven/eight/nine/ten</i>
7月	くハンバーガーショップへ行こう> (食べ物)	絵本 <i>Ketchup on Your Cornflakes</i> Hello. May I help you? ~, please. Here you are. Thank you. You're welcome. <i>hamburger/orange juice/fried potato/apple pie/salad</i>
9月 10月	くレンタルゲームをしよう> (文房具)	絵本 <i>Ketchup on Your Cornflakes?</i> Excuse me. ~, please. Here you are. Thank you. You're welcome. <i>eraser/pencil/pencil case / stapler/scissors</i>
11月 12月 1月	く何がほしい?> (動物、既習語彙)	絵本 <i>What Do You Want? / Christmas Party</i> [What do you want?] I want~. ~, please. (a) <i>dog/cat/elephant/panda/koala/bear/frog/cow/lion/pig/penguin/gorilla/mouse/sheep</i> .
2月 3月	く歌っておどろう> (動詞) (1年間の復習)	絵本 <i>Five Little Monkeys/ What Can You Do?</i> 動作 <i>jump/stand up/sit down/turn around/walk/run</i>

4) 指導者

JTE の杉山明枝が T1 として全て英語により行い、T2 の学級担任 5 名、及び介助員 3 名（以下 T2）が場面により個に応じて英語と日本語で支援する形態に変化はないが、児童数の増加に対応すべく個々の児童に合った適切な指導を行う必要性から、メインの活動の際にグループ分けを行って対応した。昨年度以上に学級担任が T1 として登場する場面が増えた。

5) 児童の実態

児童数 26 名（1 学年：6 名、2 学年：6 名、3 学年：7 名、4 学年：2 名、5 学年：4 名、6 学年：1 名）で、主な障害はダウン症、肢体不自由、心臓疾患、てんかん、ADHD、高機能自閉症、自閉症、アスペルガー障害などである。共通の課題としては、コミュニケーション力や自己コントロール力、社会性を身につけることなどがあげられる。また、26 名のうち 19 名が 1 年生から 3 年生のため、学校生活の決まりを理解することや、対人関係、基本的な生活習慣の確立などが課題となる児童も多い。また、本学級には障害の程度や疾病、発作の状態などから、医療機関との密接な連携や、常時特別な注意と配慮が必要となる児童も複数在籍している。

6) 児童の様子

英語活動にはほとんどの児童が興味をもって参加しており、HRT や JTE とのやりとりを楽しみながらネームタグを受け取ったり、JTE の問いかけに対して、自信を持って言葉や指さしで応じたり、また高学年では数や色などの語彙や“～, please.” “Here you are.” “Thank you.” などのフレーズを

覚えて自ら表現しようとするなど積極的に活動を楽しむ様子が見られるようになった。また、日常生活の場でも英語で朝や帰りの挨拶をしたり、大人との簡単なやりとりを楽しむことができるようになったりと、児童の間に英語が自然に浸透して来ている様子が感じられる。

7) 授業実践例

本章では 2009 年 6 月 22 日に実施した授業を実践例として紹介する。

(1) 単元名「買い物に行こう」

(2) 活動目標

- ① HRT や JTE、友達とのコミュニケーションが楽しめる。
- ② 繰り返される表現や活動場面がわかり、身振りや単語などで応じられる。
- ③ 音声やリズムなどの違いに気付き、外国の文化や言葉に興味や関心をもつ。

(3) 語彙と表現

tomato / lemon / orange / grape / eggplant / green pepper / corn / cucumber / banana / red / yellow / green / orange / one / two / three / four
One (Two) apple(s), please. Here you are.
Thank you.

(4) 教材・教具（巻末資料参照）

ネームタグ / CD / 絵カード（感情表現、動物、天気、曜日、果物、野菜） / 模型（果物、野菜）

(5) 英語活動指導案

作成者は JTE の杉山明枝、監修は学校長の小林省三、ならびに学級担任の鈴木幸子教諭が行った。

表 2 英語活動指導案

児童の活動	HRT の活動	JTE の活動	☆評価 ○教材
1. あいさつ ・英語活動の始まりを知る。 ・ネームタグを受け取る。	・英語活動が始まることを伝える。 <div>個に応じた支援を行う</div> 児童と同様にネームタグを受け取る。 Thank you.	Hello. Let' s start. 挨拶をしながら登場。 I'll pass you the name tags. Here you are. You' re welcome.	○ネームタグ

<ul style="list-style-type: none"> ・グループで買い物遊びをする。 	<div> C (児童) 1 : Five oranges, please. C 2 : Here you are. C 1 : Thank you. C 2 : You're welcome. </div> <div> グループや個に応じた支援を行う。 </div>	☆自分の意思を様々な手段で相手に伝えている。
4. あいさつをする	<ul style="list-style-type: none"> ・児童と共に手をつなぎ、大きな円を作る。 ・児童と共に歌う。 ・さようならの挨拶をする。 	Look at the clock. It's time to say good-bye. Let's make a big circle and sing <i>Good-bye Song</i> . See you next time
5. ふりかえる ・楽しかった事、頑張った事を振り返る。	・今日の活動を振り返らせるための働きかけをする。	☆英語活動に対する満足感や達成感を感じている。

(6)活動目標達成のための工夫

本時の「活動目標」を達成するための工夫として以下の5点を設定した。

- ①児童の発達段階や興味・関心に即した「買い物ごっこ」をメインの活動とすることでより多くの児童が人とのやりとりを十分楽しめるようにする。
- ②理解力の高い児童（グループ）に対しては、一つのフレーズの中に数や色などの複数の単語を取り入れ、子ども同士がやりとりをする（コミュニケーションしあう）場面を設定することで知的な好奇心を満たすとともに、コミュニケーション能力の育成を図る。
- ③1年生や理解力が充分でない児童に対しては、大人が個別に対応する場面や視覚的な教材・教具を多く取り入れることで、英語をより分かりやすく身近なものに感じられるようにする。
- ④お互いが刺激しあうことで、活動に目を向けることが難しくなる児童同士を離して座らせるなど、特性や発達段階、交友関係などを十分考慮しながら座席配置を行う。
- ⑤児童一人一人が達成感を味わいながら自信をもって英語活動に参加できるよう、HRTやJTEが個々の実態や課題などを十分把握した上で児童を指名する。

(7)授業を終えて

メインの活動である「買い物ごっこ」においてグループ分けをしたことで、活動がスムーズに展開され、児童とJTE及び担任がより密接で中身の濃い

やりとりを展開することが出来た。「言語」（ここでは英語）によるコミュニケーション能力や理解力そのものが充分でない児童も、表現したい語彙の絵カードや模型を指差すことで「非言語コミュニケーション」¹⁴⁾活動を展開しようとする姿勢を示していた。また、それぞれの活動の節目に歌や踊りを導入することで、児童の集中力を概ね妨げることなく授業を進行することができた。当日、授業を参観した見学者からは、「子ども達が元気に歌い活動し、終始笑いが絶えない明るい授業だった」と肯定的な意見を聞くことが出来た。

しかし、メインの活動である「買い物ごっこ」以外は一斉指導の体制をとったため、児童によっては活動に集中できず、それが全体の指導にも影響を及ぼしてしまう場面が幾度か見られた。26人の障害を持つ児童を一斉に指導することは、たとえ介助者が存在しても非常に困難を伴う。学年や障害の程度に合わせた能力別授業編成、さらにはそれぞれの能力に応じた活動形態や内容の検討、計画の作成などが今後求められるであろう。

Ⅲ. 考察

英語活動3年目を迎え、わかくさ学級の児童にとっての英語活動は外国語を用いてコミュニケーションの大切さや楽しさを体験的に学びあう活動から、知的好奇心を満たしながら、コミュニケーション能力のさらなる育成を図るものへと発展しつつある。日常生活の場でも英語で朝や帰りの挨拶をしたり、大人との簡単なやりとりを楽しむなど、児童の

間に英語が自然に浸透している様子が日々感じられるようになった。また、「言語」によるコミュニケーション活動が困難な児童にも「非言語コミュニケーション」¹⁴⁾により、指差しやジェスチャーで自らの考えを伝えようとする姿が見られるようになった。実践3年目を迎え、児童の人数が増えると共に彼らに対する指導の方法も多様性を増してきた。一人一人の児童が生き生きと英語活動に参加できるようにこれまで以上に指導計画の開発や活動の工夫、さらには教材の提示法などが検討、吟味されなければならないといえよう。

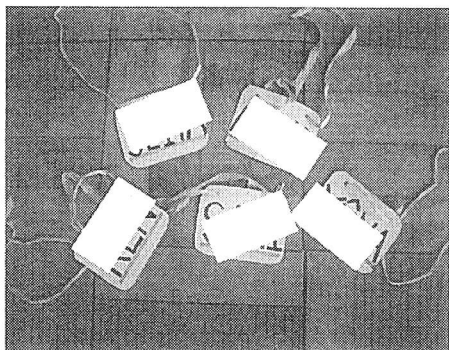
IV. 課題とまとめ

2年間の実践をふまえ、今年度から児童の実態や興味、関心の度合いに応じて編成したグループ別指導や視覚教材、教具を積極的に導入するなど新たな

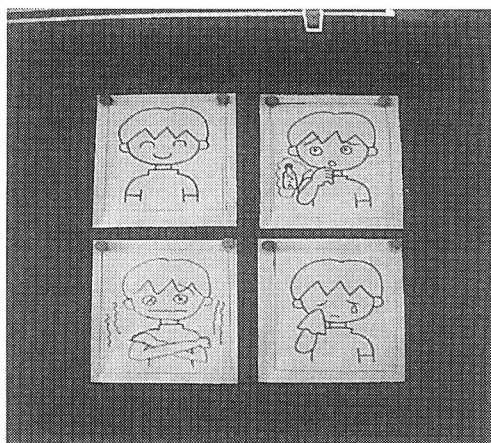
試みを展開している。これに伴い、今後は各学年や児童に応じた指導計画の開発や作成、さらには視覚教材や教具の開発とそれらの有効的な活用法についても継続して研究を行わなければならない。また、「非言語コミュニケーション」¹⁴⁾により自分の意思を伝えようとする児童に対し、JTEや担任がどのように接しなければならないのか、その指導法やサポートの仕方に関しても新たな課題として浮上している。初年度からの課題である脳科学の分野における分析と説明を進め、科学的根拠に基づいた教授法の開発も図られなくてはならない。特別支援学級における小学校英語活動に関する先行研究はまだまだ充分とはいえないが、児童との関わりを注視しながら事例を積み重ねつつ今後もさらなる研究、並びに報告を続けてゆきたい。

参考・引用文献

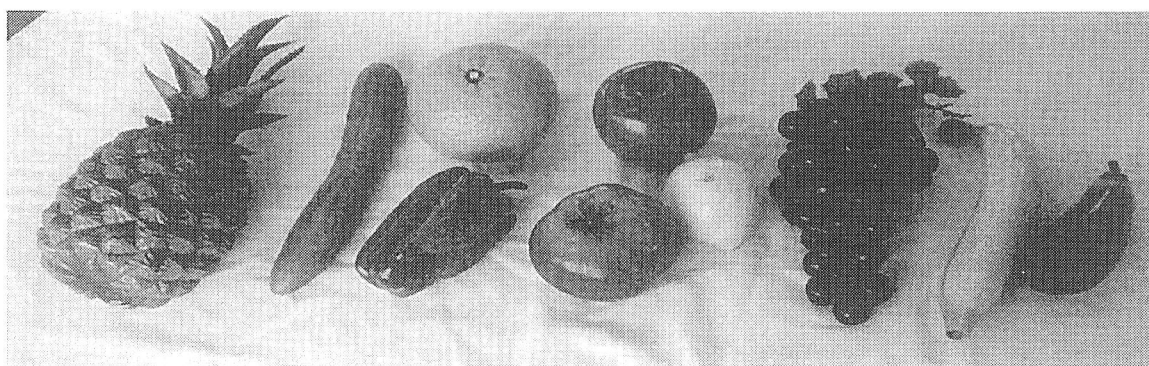
- 1) 東京都教育庁学務部義務教育心身障害教育課編. 特別支援教育推進のためのガイドライン 東京の特別支援教育～特別支援教育体制・副籍モデル事業等報告書～. 東京都教育委員会. 2007, p.4.
- 2) 前掲書 1) p.7
- 3) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編. 子ども一人ひとりの教育的ニーズにこたえます！. 特別支援教育. 文部科学省, 2007, p.1.
- 4) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 外国語活動編 1, 東洋館出版社. 2008, p.7.
- 5) 前掲書 4) p.7
- 6) 安彦忠彦監修. 小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編. 教育出版. 2008, p.19.
- 7) 木村隆, 木村尚美, 古川宇一. 息子の小学校6年間の課題と成果. 情緒障害教育研究紀要. Vol.26, 2007, p.1-10.
- 8) 渡邊寛治. 小学校英語教育の現状と期待 (特集 小学校英語教育). 教育時評. Vol.10, 2006, p.8-11.
- 9) 小林省三. 特別支援学級を基盤とした学校経営 自閉症児に英語活動をととして国際コミュニケーション力を育む. 月刊はるか★プラス. Vol.1, 2008, p.50-51.
- 10) 前掲書 6) p. 63.
- 11) 松川禮子. 明日の小学校英語教育を拓く. アプリコット. 2004, p.177.
- 12) 岡秀夫監訳. 外国語教育学大辞典. 大修館書店. 1999, p.70.
- 13) 文部科学省. 小学校学習指導要領. 東京書籍. 2008, p.107-109.
- 14) 満尾貞行. 英語活動における教材の工夫・・・絵本の利用. 教材学研究. Vol.16, 2005, p.67-70.
- 15) 小池生夫編. 応用言語学事典. 研究社. 2003, p.377.



< Name Tags >



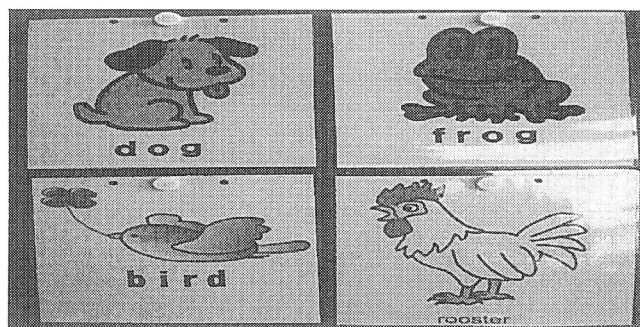
< 感情表現 >



< いろいろな果物・野菜・色 > < 買い物ゲーム >



< 担任による劇化 >



< いろいろな動物 >